

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業  
＜国際交流拠点形成事業＞)

事業名：中国近代絵画に関わる国際研究交流

事業者名：京都国立博物館

住所： 京都府京都市東山区茶屋町 5 2

TEL： 075-531-7505

FAX： 075-531-0263

HPアドレス： <http://www.kyohaku.go.jp/>



連携事業者名：

会 場：京都国立博物館、国立京都国際会館

事業期間：平成21年7月1日 ～ 平成22年3月15

## 1. 館の使命と本事業の関係

近年相次いで京都国立博物館に寄贈された中国近代絵画コレクションは、国内屈指の質を誇り、中国・欧米の研究機関からも注目を浴びている。このコレクションを基礎にした研究成果は、来る 2012 年初めに当館で開催される特別展覧会にて大規模に公開される予定である。本事業は、その準備段階として位置付けており、国内外の美術史研究者と当館学芸員との共同調査および学術発表を柱とすることで、当館の情報発信力のさらなる向上が期待される。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

京都国立博物館が収蔵する中国近代絵画作品に関する調査研究を、当該分野を専門とする国内外の研究者とともに実施し、国際ワークショップ開催などにより、その成果を広く一般に公開することを目的とする。さらに、2012年初めに開催を予定する「中国近代絵画」展に向けて、本事業による成果を反映することを目指す。

### ②事業概要

中国近代絵画について、京都国立博物館収蔵品を中心に、国内外の招聘研究者9名と当館学芸員との共同調査を実施した。その成果は、2009年12月に開催した国際ワークショップ（2009年12月16日から17日まで国立京都国際会館にて、発表者は19名）と、翌2010年3月に刊行したワークショップ論文集をとおして、一般に公開した。

### 3. 事業実績

#### (1) 事業の主な内容及び日程

本事業の内容は、次の三つのステップに分けることができる。まず 2009 年 7 月から 11 月にかけて、国内外の招聘研究者と京都国立博物館学芸員との共同調査を実施し、次にその成果を公開するワークショップ（2009 年 12 月 16 から 17 日まで 於国立京都国際会館）を開催した。事業終了時の 2010 年 3 月には、本事業の報告書としてワークショップ論文集を刊行した。なお、本事業にて招聘した研究者（共同調査、ワークショップ発表者を含む）は、本頁に掲げた別表 1 のとおりである。

共同調査としては、香港大学の官綺雲氏（招聘期間 7 月 23 日から 28 日、30 日まで、以下同）、上海博物館の陶喩之氏（10 月 2 日から 8 日まで）、上海大学の李超氏（10 月 4 日から 10 日まで）、広州美術学院の李偉銘氏、香港中文大学の李志綱氏、陳鶯氏、台北の王耀庭氏（以上 4 氏は 11 月 7 日から 13 日まで）、台北故宮博物院の賴毓芝氏（11 月 8 日から 14 日まで）を招聘し、須磨弥吉郎氏収集の中国近代絵画を中心とする当館収蔵品の調査を実施した。招聘研究者と当館学芸員との間で作品の価値等について、率直な意見交換がなされた。海外からの研究者との共同調査は以上で完了したが、11 月 27 日から 29 日まで、国内から早稲田大学非常勤講師の陸偉榮氏を招聘して、日中美術交流の観点に立った作品調査を実施した。

別表 1			
在住地域	氏名	氏名ローマ字表記	所属・肩書き
北京	郎紹君	Lang Shaojun	中国芸術研究院 研究員
上海	阮榮春	Ruan Rongchun	華東師範大学芸術研究所 所長
上海	李超	Li Chao	上海大学芸術研究院 教授
上海	陶喩之	Tao Yuzhi	上海博物館書画研究部 研究館員
上海	陶為衍	Tao Weiyan	近代絵画史研究者。画家、陶冷月の息子
香港	李志綱	Lee Chi-Kwong (Li Zhigang)	香港中文大学文物館 研究員
香港	官綺雲	Koon Yeewan (Guan Qiyun)	香港大学人文学院芸術学系 助理教授
広州	李偉銘	Li Weiming	広州美術学院 教授
広州	陳鶯	Chen Ying	香港中文大学芸術系 博士課程(中国籍)
広州	蔡濤	Cai Tao	広東美術館研究部 副主任
広州	朱万章	Zhu Wangzhang	広東省博物館 研究員
広州	黄大德	Huang Dade	近代絵画史研究者
南京	郭卉	Guo Hui	ライデン大学(オランダ) 博士課程(中国籍)
台北	王耀庭	Wang Yaoting	台北故宮博物院 前書画処長
台北	賴毓芝	Lai Yuzhi	台北故宮博物院書画処 研究員
米国(コロンバス)	ジュリア・アンドリュース	Julia Andrews	オハイオ州立大学 教授
米国(コロンバス)	沈揆一	Shen Kuiyi	カリフォルニア大学サンディエゴ校 教授(中国籍)
日本(滋賀)	古橋慶三	Furuhashi Keizou	日本習字教育財団観峰館 事務長
日本(埼玉)	陸偉榮(吉川健一)	Lu Weirong (Yoshikawa Kenichi)	早稲田大学 非常勤講師
日本(京都)	西上実	Nishigami Minoru	京都国立博物館 学芸部長

2009 年 12 月 16 日と 17 日の国際ワークショップ「中国近代絵画研究者国際交流集会」は、別表 1 の 19 名が発表者として参加した（うち 1 名は病氣療養のため発表原稿代読）。事前の作品調査に加わらなかった発表者も、その殆どがこれまでに当館にて調査をされている。この研究集会は、調査研究成果を完了した総仕上げ的な意味を持つシンポジウムではなく、現時点での成果を報告し、討論を行うワークショップとして位置付けた。そのため、事前の広報は当館ホームページや美術史研究者など関係者のみに限ったが、2 日間で 55 名の聴講者を

得た。16日にオハイオ州立大学教授のジュリア・アンドリュース氏による基調講演の後、2日にわたり研究発表18件を行った。各人とも30分の発表時間と10分の質疑応答時間のなかで、パワーポイントによる作品図版提示やレジュメ配布で、当該分野になじみがない聴講者にも分かりやすい発表に努め、同時通訳による円滑なコミュニケーションも確保されて、議論は大いに白熱した。とくに、最終日の総合討議では、これまで日中間に存在する歴史認識の違いなどの原因から、研究が等閑視されてきた日本における中国近代絵画研究の意義などが議題となった。



国際ワークショップ発表者の方々（2009年12月17日  
於国立京都国際会館）

2010年3月に刊行した『中国近代絵画研究者  
国際交流集会論文集』は、2009年12月のワーク

ショップの論文集である。総頁数は391頁で、全19名の発表者がワークショップで発表した内容に加筆・修正を施した論文を寄稿した。その殆どが本事業によって獲得した新知見を披露している。本文は各発表者の発表言語で執筆されているが、巻末には日本語要旨を付して国内の読者への読みやすさに配慮した。発行部数は500部で、ワークショップ参加者はもちろん、国内外の大学や美術館、博物館などの研究機関や美術史研究者に発送した。なお、入手希望者には無償にて頒布する予定である。

## （2）参加者の数

参加者人数      延べ 102 人

内 訳： 共同調査9人、ワークショップ発表者（2日間）38人、  
ワークショップ聴講者（2日間）55人（学生、一般の美術愛好家を含む）

## （3）事業により作成した印刷物等

京都国立博物館編『中国近代絵画研究者国際交流集会発表要旨集』、2009年12月、26頁、80部（ワークショップ当日配布資料）

京都国立博物館編『中国近代絵画研究者国際交流集会論文集』、2010年3月、391頁、500部

## （4）実施事業に関する新聞記事等

### ○新聞記事

なし

### ○テレビ、関連誌等

西上実「中国近代絵画と京都国立博物館：国際研究拠点をめざして」『清風会会報』157号、社団法人清風会、2010年1月

#### 4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

2012 年初に開催予定の「中国近代絵画」展に向けた調査研究の一環として、これまで研究が立ち遅れていた当該分野の研究の進展に大きく寄与できたことが、本事業の最大の成果として挙げられる。今回の事業は、当該分野の研究者や関心を持つ美術愛好家向けの専門性の高い内容となったが、一般への分かりやすい形での成果の公開は、12 年初の展覧会開催をとおして行うとの方針のもとで、当初の計画に沿って、基礎研究の充実に努めた。その結果、中国近代絵画を研究対象とした調査と情報収集、ワークショップの実施、論文集の刊行など、当初の計画通りの事業内容を実施することができた。なお、論文集については、今回は事業報告書としての性格ゆえに簡易製本にとどめたが、今後、2012 年の展覧会に向けて、増補改訂版として正規出版を計画している。本書は、これまで皆無に等しかった、日本における中国近代絵画史研究の基本文献として認知され、国内外に向けた京都国立博物館の情報発信力の向上に資するものと期待される。

前述したように、国内外の研究者と 2009 年の 1 年間に作品調査とワークショップの都合 2 回、会合の機会をもつことで活発な意見交換が可能となり、現在の研究課題を共有するとともに多くの新知見も得た。現代中国の発展にともない、社会全体で近代中国の文化芸術についての関心が高まるなかで、美術史研究の分野からも展覧会などをとおして、広く情報発信できる素地が整ったといえる。

中国近代絵画研究は日中戦争や文化大革命などの歴史的背景により実作品の多くが毀損され、研究の進捗が立ち遅れていた。しかし、京都国立博物館は、開館以来、京都の伝統文化のなかで受容されてきた中国伝統絵画コレクションを充実させてきたことに加え、近年、昭和初期に中国絵画を収集した須磨弥吉郎氏のコレクションの寄贈を受けたことで、宋元から中華民国まで、中国絵画史を通観できるだけの収蔵品を擁するようになった。当館が収蔵する中国近代絵画作品の絵画史研究、あるいは歴史的背景の研究を徹底し総合すれば、日中文化交流の実態、ひいては日本文化の根幹となる京都文化のアイデンティティを、より鮮明な像として提示することが可能になったといえよう。

実際、共同調査を終えた招聘研究者からは、「京都国立博物館が収蔵する中国近代絵画作品は、作品そのものの価値とともに、その制作・伝来等の付帯情報の確実さにより、学術的価値は非常に高いといえる。また、各研究者の研究上、大きな収穫となった」との意見・感想が得られた。また関連する資料情報の提供も受け、当館学芸員にとっても非常に有益な調査となった。ワークショップ当日のフロアからのコメントなどでも、中国絵画研究や日本近代絵画研究など関連分野の研究者から高い評価をいただいた。とくに、中国近代絵画というひとつの特定分野の研究の深化だけではなく、東アジア地域全体の絵画史を通史的にかつ地域横断的に把握するための一助となるとの評価もあった。

次年度以降は、今回の事業で明らかになった研究課題の究明、および展覧会開催に向けての準備を加速させてゆく計画である。目下の課題は、京都国立博物館が新たに獲得した中国近代書画作品は、2000 年以降に限っても総計 2,000 点を超え、その量が膨大であるため、作品の写真撮影等、十分な資料整備がなされていない。展覧会事業などをとおした大規模な一般向け公開に先立ち、一連の整備を急ぐ必要があると考えている。